特徴特化魔術師

Raja＆Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特徴特化魔術師

【Ｎコード】
Ｎ７０５７Ｚ

【作者名】
Ｒａｊａ＆Ｙ

【あらすじ】
世界から化け物と呼ばれた一人の青年「神路魔　黒己」が『魔法』を学ぶ物語。
彼が自身生まれつきの『特徴』のせいで化け物扱いをされてきたにも関わらず人と向き合いながら成長していく物語。
今現在の世界の生活に普及している『魔法』をどういう風に捕らえてどう活かすか。彼自身が生み出した答えは果たして世界をどう動かすのか・・・。政府はそれをどういう風に対応するのか。
さぁ、世界を変える魔法の物語を始めましょう。

＊誤字・脱字等が多々あります。できるだけ直していきたいので見つけた方は感想に書いていただければ嬉しく思います＊

第０章第１／２部～それぞれの行動　家族編～（前書き）

＊この物語には厨二病表現が含まれています。厨二病に対するアレルギーを持つ方はブラウザーバックを直ちにクリックし、他の小説をお読みになってください＊

第０章第１／２部～それぞれの行動　家族編～

「あづぃ・・・」
俺は汗を手の甲でぬぐい呟く。手の甲でいくら拭おうが汗は止まるわけでもなく、アスファルトにたれ落ちる。
着ているＹシャツがすでに肌に張り付く程になっていた。絞ったらどうなるのだろう・・・と、どうでもいいことが頭をよぎる
俺、神路魔　黒己は真夏の真昼間の中、海や川ではしゃぐわけでもなく、
アイスや冷房の効いた屋内でくつろぐわけでも無く、目的地に向けて太陽で熱された熱いアスファルトを踏みしめて歩いていた。
かれこれ４時間ほど飲まず食わずで歩いていたせいか、目の前がぼやける。
熱い、もう暑いじゃなくて熱い。自然サウナとはよくいったものだね、本当。がっちりとした長袖のスーツ（黒色なのできっちり保温します☆）を着ているせいでもあるんだけど。自覚はしている。
何故このような真夏日和に街をスーツ姿で出歩かなきゃならンのだ！と叫んでも街中の人々に白い目をされるだけで何もおこらないのはわかりきっているのでやめておく。
「ゲ、限界・・・あんのクソ親父・・・」
俺はスーツを脱ぐと首にかけてあった十字架形ネックレスをつないでいた鎖ごと引きちぎる。後頭部に衝撃が走ったが痛みは感じなかった。
その代わりに身体にあった空腹感とある程度の意識を取り戻す。
「あぁ、生き返る・・・・・・あとで新しい鎖を買わないとな・・・その前に学園の寮に行かないとな・・・というか今思ったら普通に休めばよかった・・・」
俺は後悔しながら渋々十字架のネックレスをスーツの上着ポケットに突っ込み歩き出す。さて、後何分でつくでしょうね？と俺はスッ

キリした頭の中で自問自答した。

＊＊＊＊

「ふざけないでください！！！！」

少女は大声で怒鳴り机を両手で力任せに叩く。声と音は部屋にとどまらず隣接している廊下にまで響いていた。

夏休み真っ最中の学園に在校生の４割の生徒が教室やら食堂やら訓練場やらで自分のやるべきことをやっていた。その中にいきなりの怒鳴り声が割って入ったのでなにがあったのかとその怒鳴り声の発生元、校長室の前に大勢の生徒が集まっていた。

「凛はなにに怒ってるか知らんが、親に向かって怒鳴り上げるたぁお前もやるようになったぁ？」

校長室はお世辞ありでも綺麗という言葉がでないほど書類で満たされていた。ただ、机や椅子、棚やそこにある本などは高価なもので満たされていた。

「そんなことはどうでもいいんです！！！それより何故あの兄さんがＡクラスじゃないんですか！？体術、魔法、魔術、精霊術医術その他多数！明らかに私より１５分に長けている兄さんが編入と聞いてぬか喜びした私がバカでした！」

少女がもう一度机を叩くと、上に載っていた書類が床に舞うように落ちていった。少女はソレを気にせずに机を前に座っている男を睨む。男は困ったように後頭部あたりを掻く。少女が怒っていることに対してじゃない、書類が滅茶苦茶になっていることに困っていた。

「お前なぁ、書類どうしてくれんだ？・・・まぁ、とりあえず先に言っておく。あいつはあいつなりに考えて結果をだした。確かに、あいつの実力、知識、道徳などを掛け合わせてもこの学園の五本指に入る事は確実だろうな。だがな、あいつは俺の申し出を断ったんだよ、何故だかわかるか？」

男は落ち着いて話ながら手が届く範囲で書類を拾い上げる。
「ッ！・・・いえ」
少女は自分の考えとまったく違う回答をされたので顔を瞬間的に強張らせた
「あいつはな、自分を化け物だと認識してるんだよ。実際、俺の遺伝子を綺麗に受け継いだしな。そのせいか、事情の知らない奴らには人間としてではなく化け物としか映ってなかったらしいな。小さいころからのトラウマもあってか人に対して魔法を使うことができなくなっている。だから優秀なＡではなく主に体術面を鍛えるＥクラスに移させてもらった」
男は少し威圧のかかった声で少女に言い分を聞かせる。少女は悔しそうに顔を強張らした。
「お前は何か勘違いをしてるかしらんが、俺は俺なりの考えを持ってＥクラスに編入させた」
「・・・なんですかそれは」
少女は怒りを抑えながらも不機嫌声で男に返答した
「あいつは特化魔学科に編入させておいた。まぁ、特例という処置をとらなきゃいけなかったがな。実質いま体術の面でも魔法の面でも一番レベルの高い特化Ｅクラスにだ。成績だけの連中の所に黒己置いといたら死人でるぞ、死人。という訳で入れた。というか、入れるしかなかった。あいつの学園内の居場所はあそこしかないしな」
男は大口を開けて笑いながら答える。少女はその表情に釣られて口を緩めた。
少女からは怒りの感情はなくなっていた。
「さて・・・少し長くなったな。生徒会長神路魔凛、書類の片付け手伝ってもらう。自分の始末は自分で片付けろ」
「ハイ！」
神路魔凛は上機嫌になりながら返事をし、父親の仕事の手伝いを始めた。
校長室で聞いていた生徒達がこのことに関して噂をして事件が起こ

ろうとはこの時は誰も予想だにしなかった。

＊＊＊＊

今日、地方観測上最も気温の高い３６度を記録した猛暑の中。分厚い鉄を使用したプレートアーマを着込み、腰に細身の剣を携え
た者、『騎士団員』が街中を歩いていた。基本的に各都市に対して２０人規模で活動する騎士団はいまこの都市タリスには５０人という規格外の多さで配置されている。少ないように聞こえるが、騎士団員一人一人が都市の全軍隊に全力で攻撃を仕掛けられても正面から応戦して５時間は耐え抜けると言うそれまた規格外の強さがあった。昔は化け物扱いをされていたにもかかわらず、今では世界の人々の中ではヒーロー的存在になっていた。
その騎士団員総計５０人が気を張って街中を警備してるということは世界の歴史を塗り替えるほどの出来事が起こることを予測されていた。
騎士団員は夏のせいでもあるがほとんどは緊張からの冷や汗にまみれていた。

＊＊＊＊

「・・・・くそ」
朝が過ぎ、夜を迎えた都市タリスの中、一人の騎士団の鎧を着けた少し暗い金髪の青年が誰にも聞こえないように言葉を発する。顔は悔しさで歪み、人相の悪い目をしていることが青年自身でもわかっていた。それでいて直そうとも思ってなかった。
青年の名前は神路魔　零。現１７歳の若さから世界最高の戦力を持つ騎士団の中の隊長を務める。その神がかった才能と誰に対しての慈悲の深さ、正義感から彼は『Ｋｎｉｇｈｔｓ　ｄｅｆｅｎｄ　ａ

ｇｏｄｄｅｓｓ（女神を守る騎士）』とたたえ上げられているが彼自身そのことに対して無関心ではある。
それほどまでに呼ばれている彼も人間であり、悔しいという心も人並みに持ち合わせている。
しかし、彼はそれを表に出すことはなかった。「それではまるで心がない女神を守る人形じゃないか」と戦友にも言われたことがある。冗談であることは彼自身でもわかっていた。
それがまるで嘘のように彼は顔を悔しさで歪ませた。理由はただ一つ、彼が今最も尊敬する人物が学園に通うことになり、ただの高校生に成り下がったとことと、その学園の中で最もランクの低い地位に着かされた、と昨日実の妹から連絡があったのだ。
彼の尊敬する人物は、彼が知っている限りでは誰よりも優しく賢明で、それでいて全ての力という項目での強さがあった。
その人物が通わなければならないというわけでもない学園に無理やり編入され、しかも地位が一番の格下だというのだ。彼にとっては信じがたいことであり、許しがたいものであった。
零はそんな尊敬する人物を2日間掛けて探しているのにも関わらず今だ一度も接触がなかった。
都市全体を探したわけでもなかったが、他の団員達も今現在捜索中で、その団員達からも期間中その類の連絡を受けとらなかった。
零の私事で動いているように思えるが、彼の尊敬する人物を探せという命令は彼自身から出されたのではなく、彼の所属する騎士団のトップに君臨する『総団長』から直々に命令が下ったのだ。いままでただの人探しだけでは総団長直々に命令が下るのは決してなかった。だがしかし、その命令が下ったということはその人物が騎士団にとって脅威、あるいは
力になりかねない者であると同時に、世界にとって必ず必要な要であるのは違いがないと騎士団員のほとんどが考えていた。
それゆえ誰も手の抜けない状態が何日も続いている。
その人物は先程の妹からの情報によれば偶々零達の暮らしている都

市タリスにある魔法総合学園メシアに3日前に編入されたという。
できすぎた話で彼は驚かずにはいられなかった。
そういう経由から悔しい顔もすれば心では少し嬉しいと感じてる。
零自身の嬉しさの原因は尊敬する人物、『神路魔黒己』は人間の皮をかぶった化け物だと世界の眼には映っていたにもかかわらず学園という極々普通の場所に転入できたのは本当に良かったと思っているところから出ていた。
そんな心境を持ちながらも『女神を守る騎士』は今夜も夜の都市を隙間なく練り歩いていた。

第０章第１／２部～それぞれの行動　家族編～（後書き）

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――

どうもただの高校生Ｒａｊａです。小説を書くこと自体初心者の私がなにを思ったのかＷｅｂ上にその小説を記載するという暴挙にでました。

そんな小説を読んで頂ありがとうございます。これからも続きを上げることになりますがよろしくお願いします。

＊次回予告＊

今回魔法について一切触れませんでしたが、次からはかなり無理やりの形で絡めて生きたいと思います。

第０章第２／２部～それぞれの行動　世界編～

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――

第０章第２／２部～それぞれの行動　世界編～

過去に遡り西暦２１０３年８月２８日、現代に受け継がれるこの日を『魔学世界革命』と名付けられた。

夏の猛暑が度重なる中、世界が着々と変化を遂げているとは知らずに、世界各国を治める者達が集まって会議をしていた。
会議事態は別段と珍しくはないわけでもないが今回の会議は何処か空気が違うというのを集まったもの全員が錯覚がした。
会議が行われている場所は現在でいう魔法都市タリスにある騎士団本部の会議室で行われていた。
別段広いというわけでもなく、狭いというわけでもない。しかし、中で話されている内容はどんなことがあろうとも外に漏れることは決してなかった。というのは西暦２１０３年の技術で最も防音に優れている素材をふんだんに利用し、もし外部から攻撃を受けた場合には騎士達による徹底的な排除が待っているのでこの場所で誰かを襲うというバカなマネをしようとした者は全くといっていいほどいなかった。
盗聴器などの対策はこの部屋に足を踏み入れた瞬間、機械類は全て監視カメラから発せられる電磁波による特定が行われ
その類の行為が見つかった際には先と同じ騎士達による排除が待っている。
という様々な理由があるため少人数で話し合いをするならばここが一番の安全な場所だった。
会議室には長方形の机をロ形に並べ、そこに椅子を置くという簡単なものだった。
椅子に腰掛けているもの達は男女計８人、若くて５０代後半、最も年齢の高いものは８５歳という高年齢層が集まっていた。

「さて、そろそろ決断して欲しいのですが、ベルエス殿」
沈黙が続いていた会議室に老いた声が響き渡る。発言者は世界から見て北部にある大陸の中心国『パレス』の国王からなるものだ。ベルナスと呼ばれたものが顎に手を沿え神妙な顔で考えをまとめ、手元においてある紙の束をもう一度拾い上げそれに基づき思考して発言をする。
「わかりました、パレス老人。わが国で『クラフィス』の普及を試みましょう。ただし、軍費及び障害賠償などはアナタ達国々で出費していただくことになりますがやろしいですかな？」
ベルナスが喋り終わると小さな拍手が起こる。それは同時に全ての国と国が交渉条件を認めるという意味につながり、そこで今回の会議が終わった。

＊＊＊＊

西暦２１０３年、世界は資源の底が見え始めているのを今更ながらも認めていた。石炭や木炭、石油などの化石燃料や水などが文字通り近年には枯れ果てて無くなるという事態に迫っていた。そこで、新たな資源がないかどうかすべての分野で試行錯誤した結果、『クラフィス』現代では『魔力』や『魔質』と呼ばれる物を利用した『資源再生』が有力だと考えられた。

『クラフィス』は目視できない。色もなく匂いもない。なら何故人間はこの『クラフィス』を確認できその資源再生が可能になったか、その理由には一人の東部出身の男『上島　勝義』という人物の影があった。

＊＊＊＊

世界がまだ『魔学』ではなく『科学』が普及していた２１０１年、当時３５歳の勝義がまだ無名で、東部の田舎町で研究を続けていた。彼は妻子供は居なく、単身の身で苦労していたある日のこと、彼が持つ田舎町の隅にある研究所で今までに無い物を眼にすることになる。彼が見たものは一匹の『虫』だった。
その『虫』今までに無い形状をしていた。普通の虫にたとえるなら蜘蛛に似ていた。しかし、足の本数、頭部となる場所の数、なによりその蜘蛛のような虫から出される糸が他の蜘蛛とは違い不可解だった。
色は普通の蜘蛛と同じだが、強度、他の物質による反応およびそこからなる変化。
その変化とは接触した物質とは全く違う形質に『変質』させるというものだった。
勝義はその反応を『ＳｏｒｃｅｒｙＣｈａｎｇｅ（魔法のような変化）』ＳＣと名付けた。
その蜘蛛の糸からなるＳＣは世界を驚愕させる物となる。
勝義が一番にやった実験は、糸を水に浸してみることだった。結果、水は炭素、硫黄化合物、窒素化合物、金属類も含まれている石油へと変化させた。その石油は本来の石油が燃焼するときに発生する有毒なガスを全く排出しなかった。
次に勝義が実験したのは糸が植物に関与した場合である。対象物はコケ植物、シダ植物、種子植物の陸上植物、マツバウミジグサ、リュウキュウスガモの海草を使用した。
関与の仕方は葉に０．１ｍの糸を貼り付け２時間ほど空気に触れさせないで放置するというもの。
結果、全ては異なるものに変質していた。コケ植物は形を残したまま質量そのままで銅に変質し、シダ植物は形こそ無いものの質量はその
ままで二酸化炭素に、シュシ植物は入れていた袋に穴が開いて燃え

後があるところからいることから可燃物に、
海草の二つを入れていた袋からは純度１００％の金粉と銀粉が取り出された。
勝義はそれらのＳＣの性質と公式をもとめ1年間更なる研究を重ねた。
そして２１０２年9月２５日、勝義はある実験で無名から有名な研究者になる。それは、人体実験だった。
勝義は人体実験をやることを前提にネズミ、猫、犬、カエル、魚などの動物実験を重ね、ある公式が生まれた。
それが後に伝わる『魔法』『魔術』だった。
動物実験結果に対して共通の反応が見られた。それはシックスセンスの覚醒と知能の向上である。
凶暴だった犬は人の言葉を理解し、猫はその場で二足歩行を行い、ネズミの場合は数式を理解し解くという物となった。
そして、魚類、カエルに入れた場合。カエル、及び魚類は糸を関与させる前と同様のエサをやっても食べなくなり、代わりに
何も無いところから何かを食べるような動作をしていた。実際、カエルと魚類には何も与えずに3ヶ月放置したが
全くもって栄養に関する健康上には問題が無かった。しかし、魚類とカエルの胃の中には解体しても何も発見できなかった。
勝義は仮説を立てた。「もしかすると糸に含まれる形質を変化させる何かが常に空気中に発生しているのでは」と。
そして「糸を関与させたカエルと魚類は『ソレ』を目視し、触ることも操作することもできるのではないのか」とも。
それらの経由から勝間は自分に対しての人体実験を行った。
２ｍ程の糸を２０ｃｃの血液とまぜ、その血液を反応が起こる前に自分の体内に戻した。
結果は何も起こらなかった、と思われたその2時間後に勝義の視界から今までに無かったものが写しだされる。
それは何も無い空間からなる歪だった。

ソレこそが現代の『魔力』や『魔質』、世界初めての『クラフィス』の発見だった。
そして、ソレを操作し、自分自身および他の物質に影響を与える方法を勝義は『魔法』『魔術』と呼んだ。
その研究結果及びその論文をまとめたものを東部の国家に提出し、国家とその国の研究者はそれを１ヶ月間掛けて受け入れた。
そして『魔学世界革命』が起きた。『クラフィス』の影響力は異常なスピードで広がっていった。
ベルナスが国家会議を終え、勝義と合流し、一時間後早速１ｔの銅を全て石炭に変えるれるかと頼むと勝義はコンマ１秒でそれを成し遂げた。
ベルナスは夢でも見ているかのようだった。しかもその石炭を燃焼させたとこ有害な物質が含まれるガスが排出されることが無かった。燃えてできた煙は無臭無色そもそも煙が出ていた事を実証することができなかった。しかし熱エネルギーは普通に出ている事から資源に利用できることを確認させられた。
『魔学世界革命』は資源と同時に世界の環境問題を解決させた。
勝義はその後研究に明け暮れ、西暦２１３１年６５歳彼は未練なく笑顔を浮かべながら死去。
彼の意思と子孫は以後神路魔として受け継がれていくことになった。

＊＊＊＊

そして現在西暦２２５９年８月２８日『魔学世界革命』から１５６年後の今、世界は不穏な空気に包まれていた。
北部のレイナス大陸、西部のデクレブ大陸が連合を組み、ＲＤ北西連合ができあがった。
そして魔法都市タリスがある中部のハレナス大陸と東部のメキリス

大陸の連合、ＴＨ中東連合ができ。南部のハワレク大陸が孤立状態にある。
世界はこの３勢力、ＲＤ北西連合、ＴＨ中東連合、南部の孤立勢力によって戦争を繰り返し、その主な戦力『騎士団』『魔法師』を中心に
この物語が始まったのであった。

第０章第２／２部～それぞれの行動　世界編～（後書き）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー

魔法の初めての発見、現在の世界の勢力を書かせていただきました。
少し無理やりな感じですが、第０章完結です。
一様やっとのことで本編に入ります。長い説明文を考えるのはあまり得意ではなかったので、やっと好きなようにできるという気持ちがあります。感想、指摘など書いていただけるとありがたいと思います。

＊次回予告＊
０章で書いた魔法を惜しみ無く使います。
第１章第１／１５部～小さき野望と優しき魔術師～

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー

第1章　第1／15部～小さき野望と優しい魔術師1～（前書き）

長くなるので第1部を2分割させていただきました。
＊この物語には厨ニ病成分が含まれて降ります。アレルギーまたは拒否反応が起こる方はブラウザバックをクリックし、他の小説をお読みになられてください＊

第1章　第1／15部～小さき野望と優しい魔術師1～

戦争というのは突然起こり無関係な人を巻き込むものだ。
極々当たり前のことだが目の前で目撃してしまえば流石に止めないわけにもいかないだろ。
正直厄介ごとはあまり好きではない。だけど無意味に消えていい命なんてものはどこにも無い。
たとえ俺、神路魔　黒己に対して『化け物』と批判しようが、過去に他人を悲しませた奴だろうが関係ない。
別に全て守ろうってわけでもない。ただ目の前で消えていかれるのが不愉快なだけだ。
だから今目の前で起きている物事に関して俺は怒りを覚えている。
騎士団が今更ながら金属製のプレートを鳴らしながら前線に走ってきているが、無残に殺された人が生き返るわけでもない。
ある人は両腕を切られてその場で失血死したり、ある人は首を切り裂かれ窒息死だ。目の前で血の海が広がっている。
不愉快だ。怒りなんてもはや通り越して呆れている。血の臭いが鼻を刺激する。他の国の騎士団がいつの間にか俺を囲み剣を向けている。
「死ねえええ！！」
一人の騎士が俺に向かって剣を振るう。左腕が跳ねられたが別に痛みや恐怖は襲ってこなかった。切り口から血があふれだすがすぐに止まり傷口を皮膚が覆った。とんだ化け物だ、俺は。
また2時間もすれば新しい腕が生えて要るのだろう。
騎士は顔を怒りに染めまた剣を振るう。右腕が地面に鈍い音を立てて落ちる。そして切り口から血が噴出したかと思えばまたそれを皮膚が止める。
俺は笑った。血が服を赤く染めているのを気にせずに。
俺は祈った。無様に殺された人たちのために。

俺は怒った。この状況を作った奴を。
俺は泣いた。この世界に対して。
そして騎士は再び剣を振るう。次は首だろう、そう直感した俺は脚を曲げ体を下げ刃を避ける。
剣が頭を掠める。そろそろ俺は行かないと行けない。こんな『化け物』な俺ができることは、こいつらに指示を仰いでいる国の権力者の説得、最低の場合この世の中から消さなければならない。しかしその前に騎士達をどかさないといけない。
俺は頭で想像した、目の前の騎士が全て倒れているのを。そして『創造』した。俺を囲んでいた騎士達は地面に倒れこんだ。
息はあるが恐らく、味方の騎士達が止めを刺すだろう。だが俺は行かなければならない。このばかげた戦争を止めるために。
俺は走った。無い腕を振りながら。体に銃弾と刃が突き刺さるのを無視しながら。
戦争は当然に起こった。綺麗な街が破壊されていった。さっきまで人が楽しそうに騒いでいたこの街を。
人の声が喜びにあふれていたこの街は今は悲しみ声に変貌していた。だから俺は走ったこんなちっぽけな世界の一部を救うために。
自分の手が血に染まる。人を殺す度に快感を覚えてくるようになった。
俺は『道具』としてこの戦争に送られてきた。兵隊のように銃なんて物を持たずに、騎士のように剣を持たずに。
だけど俺には武器がある。『魔術』だ。頭で想像するだけで人を壊せる武器。
動かなくていい、想像するだけだった。それだけで、何も無いところから殺傷できる何かが生まれる。
「ウッ・・・オエェ」
俺は恐怖のあまり嘔吐した。頭がズキズキと痛むがやがてそれも快感になる。
世界が崩れていく想像をした。ガラスのように砕けていく世界を俺

は嘲笑った。
砕けた後に残ったのは暗闇だった。
やがて暗闇に包まれるこの世界に閃光が走る。
そして俺は目を覚ました。

＊＊＊＊＊＊

太陽がカーテンを通り越して光を部屋に与える。
「・・・・眩しい」
俺は布団を頭から被り光に対して抵抗を試みる。
しかし、暗くなると同時にさっきの夢がまたフラッシュバックする。
吐き気がした俺は布団をどけ跳ね起きるとトイレに駆け込み嘔吐する。胃液しか出なかった。
さっきのは何だったのだろうかと疑問に思ったが、考えるのをやめる。
胃液をトイレの水で流した後、何をすればいいか考えながら部屋を見渡す。
最低限のものしかこの部屋には送っていないので、一人暮らしにしては中々の広さだった。
２０畳の部屋にシャワールームとトイレ、キッチンがある。
他の部屋よりはかなり優遇されていると思い、少し罪悪感が芽生えた。
「そういや昨日やっと寮についたのか・・・」
昨日の夜、朝から探し回ってやっとのことで目的地に着いた。魔法学園メシス第一付属寮に。
俺は飛び跳ねるほど歓喜はしなかったが、嬉しさのあまり涙を出したのを覚えている。

見つけた後、すぐさまここの寮長から部屋の番号と鍵をもらい、部屋に入るとあらかじめおいてあった荷物の中から学園に必要な制服と鞄と教材を見つけ出し、纏めるとすぐさま魔術でベットを呼び出し、布団を敷いて就寝に入った。
一様寮の見取り図はもらったが、１階につき３０部屋で、３階まであるこの寮は実際に歩いて見ないとわからないことだらけである。
次いでに此処、俺の部屋は３階の３００１室だ。別に説明しても意味は全く無いが。
俺はとりあえず考えるのをやめると寝巻きを脱ぎ捨て制服に着替えると、洗面台に行き寝癖をある程度直す。
「今日から高校生か・・・・」
不安と希望を胸に部屋から出た。

＊＊＊＊＊＊＊

「昨日の夜、俺見たんだよね・・・」
「な、なにを・・・・」
「第一寮に黒スーツの男が入るのを・・・・体系は中性的・・・・というんだろうなあれは。そして髪の色は赤黒かった・・・
寮に入ると急ぐようにして寮長に話をつけた後部屋にこもったらしい。
その後寮長に話を聞いたんだが、何も答えてくれなかった・・・。
そしてこの頃騎士達が血眼で探しているのも確か赤黒い髪の色で中性的な
体系の男性だったはず・・・・」
「・・・・怪しいな」
「そしてもう一つのネタとしてはこの特化Ｅクラスに編入生だ・・・
夏休みの真っ只中編入するのはおかしくないか？というか
夏休みが９月１５日までってのがおかしくないか？」
「そりゃぁ、お前、著作者が「あ、やべ、日付設定ミスッタ」とか

いって夏休み延期したんだからよ。仕方ないじゃないか」
「・・・というかさ、描写の一つも入らないこの会話に意味はあるのか？」
「無いな」
夏休みの学園で、二人の男子生徒は教室の中で小さくため息をついた。

＊＊＊＊＊＊＊

部屋から出ると小奇麗な廊下を足音を立てずに通り抜け、寮の外に出た。夏休み中は昼間まで寝る生徒が多いのであまり足音を立てずに廊下を歩くのが暗黙の了解だと言うことを昨日の夜寮長から聞いていたので早速実行してみた。
寮の外は中と違い、活気付いていた。
この魔法都市タリスは中部大陸の中心となる都市で、ただでも物流が多い中部大陸だがこの都市はその中でも一番といえる。
そのため、わざわざ遠い国からこの都市に足を運ぶ観光客が多いので、早朝からかなり人通りが激しい。
しかも第一寮の近くには繁華街があり、その繁華街こそこの都市一番の見所になっているためかなり暑苦しくなっている。
俺はあまり大衆は好まないので繁華街を横切って騎士団本部に向かって歩き出す。
何故わざわざ騎士団の本部に顔を出すのかというと、建前はその本部に所属している家族に会いに行くためだ。
「・・・元気にしているのかな。あいつは」
俺はそうぼやきながら人気の少ない所を通り抜け、途中で見つけた果物屋で手土産を購入しつつ猛暑のなか汗をたらしながら熱されたアスファルトを踏みしめ昨日と同様に歩き出した。

＊＊＊＊＊＊＊

人ごみの中、人ならざるものが紛れ込んでいた。実体が無い影だった。形はまるで、壁に映った人影のように見える。
影は一人の青年を見ていた。その青年は戦争に利用させないための保護対象であり、この世の中からすれば『最終兵器』となる者だった。
影はゆらりと青年の後ろを追いかける。青年はときどき何かを感じ取っているのか立ち止まりあたりを見渡したりする、がすぐにまた目的地に向けて歩き出す。
影は青年を尾行する、まるで彼を守るように。青年は気づかないフリをしている、何事も起こらないように。
しかし、そんな彼とは対照的に事件を起こそうと企む人が居る。青年の前には人だかりができていた。
青年は持っているバスケットを地面に投げ捨てその人だかりに向かって走り出す。影はそんな彼の後ろを追いかける。
彼が立ち止まり「何がありました？」と情報を聞き出し、事件の解決を始める。
人だかりの真ん中では重症を負った青年と同じ制服の少女が倒れこんでいた。肩と腹部に深い刺し傷があった。
影は人の言葉に耳を傾ける
「騎士はまだなの？」
「いや、いまこの都市のほとんどの騎士が戦争に出向いているらしい」
「そうなの？じゃあ医術魔術員とかは？」
「それが、１５分後に来るらしいが絶対間に合わないだろう」
「誰か治せる人いないの？」
「いや、さっき怪我人と同じ制服を着た奴が治せるとか何とかで」

影は見つめる、人だかりの真ん中で空気中に漂う魔力をかき集め、少女に注ぎ込む青年の姿を。
そして見て野次馬達はざわめきだす。少女の傷口が魔力反応をおこして発光する。少女の傷は完全にふさがっていた。
ソレを確認すると青年は目的地に向かって歩き出す。少女は青年にお礼を言うが彼はソレを受け流す。
嬉しそうに青年を見つめると少し揺らめいて、また影は青年を追いかける。
少女は青年の背中姿をみながら頬を赤く染めていたのが横切る時に見えた。
（・・・あい、カわら、ずだ、ね）
影はそう呟くと満足したかのように底へ沈むように消えていった。
青年はそんなことも知らずにアスファルトを踏みしめ目的地を変えて走り出した。

第1章　第1／15部～小さき野望と優しい魔術師1～（後書き）

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－

メリークリスマス！！！彼女居ない暦＝年齢のＲａｊａです。

さて、今回からやっとのこと本編に移っていきます。本当、文才とか表現力とか彼女とか欲しいものです。

かなり無理やりに纏めています。正直さっき書き上げたばかりなので手直しとかしてないです。

次の部は本来ならば１つに纏めるはずだった１部の続きです。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7057z/

特徴特化魔術師

2011年12月25日01時53分発行